慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ヴェニスの石（上）ラスキン伝一八四九-一八五三年の一節
Sub Title	
Author	奥井, 復太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.3 (1924. 3) ,p.375(71)- 398(94)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240314-0071

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

雜録

『ヴェニスの石』（上）

ラスキン傳一八四九－一八五三年の一節

奥井復太郎

一

一八四九年「建築の七燈」を擱筆したるジョン・ラスキンは同夏休養の爲め瑞西の旅行を企てた。從つて吾々は再び山嶽高地谿谷の間にあつて「蟻の如く多忙なる」彼の姿を見出すのである。故に此の旅行はラスキンが「建築の七燈」の中に於いて豫告せる次著「ヴェニスの石」には全く無關係であり又其の目的の爲めの旅行は同年再び伊太利へ赴いた事である。ラスキン自から誌す所によれば、一つの運命的出來事が一八四五年の彼の上に加らなかつたとすれば「ヴェニスの石」は正に「シャモニの石」でなければならなかつた。一八四六年の旅行は一八四五年のヴェニス旅行と相俟つてラスキンが雲霧丘陵岩石蘚苔の研究より建築藝術のそれに轉せる劃期を示すものであるが、アルプスは依然彼にとつて限り無き觀喜と尊嚴との境域であつた。故に一八四九年の瑞西旅行には再びラスキンが自然風景の解説に轉ぜんとする萠芽其の本來の道に復歸せんとする用意を認めうる。

ヴェヴェー、シャモニ、ロオン谿谷、ツェルマアトの諸地方に於ける自然はラスキンに無限の幸福と滿足とを與へ、平和、或ひは荒涼なる、而して莊嚴なる山嶽、高原、草地は常に讃美と嘆稱と而して禮讃とを以つてラスキンの心を充した。「近世畫家論」第三卷に現はれたる野

章の讃美、マシュウ・アーノルドによりてラスキンの偉才として引用せられたる章句は實に此の間に於ける彼の感銘に外ならない。かくして此の旅行は「近世畫家論」續卷の材料を提供し、同第三第四の兩卷は其の內容を數度の瑞西旅行中四九年夏の旅行に負ふ所頗る多い。茲に得られたる印象、記錄せられたる觀察は兩卷の最も重要なる頁を構成するものであり、從つて天空、雲霧、山川、草木、岩石に關する彼の記錄即ち書翰日誌は兩卷好個の補足たるものである。殊に此の時に於けるラスキンの貴重なる發見の一つとしては、其が「近世畫家論」第三卷第十章第十四節に說かれたるかの「想像力の厭倦」に關する知覺がある。廣汎なる觀察を許し、或ひは休安なく不斷の刺戟を加ふるによつて、觀察物象に連結せらるべき想像力は散逸し其の生氣を失ふ。故に貴き價値を含める事物のたゞ一顧を備する事なしとて看過せらる。かゝる弊は唯一物象、些々たる物體に吾人の注意力觀察力を集中せしむる事にとつて除かれ茲に廣大なる想像の世界を發測と現前せしむ。かゝる悟は此の年六月三日ヴェヴェー地方の散策の中に得られたのである。

其の日記には次の如き記錄がある。

『六月三日ヴェヴェー午後Bolonayに散步す、非常に幸福の感ありながら尙ほ何か悲しき思ひに充つ、余は恐らくは再び是等の愛すべき風光の地に在らざるべしとて。今日又嘗てより兩親にかゝれる若否であつたが故に、此日の日沒は已の若き日の去れるが如く沈んだ樣な感を與へた。

先づ葡萄樹の間生氣なき石壁の間を暴苦しく行く、一兩度聊か意氣を失ひ、此の散策に厭倦を感じ始む、其時身體のみになつて景色を見る事を止めて景色に余の、心を投じ、遂物するが如く强き想像の力――眞なる想像力――を以つて眺め始めた。すると其はあらゆる死せる如き塀壁を輝かし、余は其の上にかゝれる葡萄の小枝各々に魅力を感じた。此の感を保つには努力を要するも其はその續く限り詩にして、人が斯くの如き風景の一部を描き、發明し、それに光榮を與へうるはかゝる想像の下に於ける時のみであると感じた。「余は瑞西にあり」と繰返し繰返し云つた。途に其名は誠なる一聯の聯想を齎し返へし、已の少年の魂を又もや再び持てるを感じた、余はあらゆる大なる默想的藝術の此の出所を充分に主張せる事なし。之れなくしては全風景も棒片、石、峻しく塵なき路に過ぎなかつた。

余は同じ經驗を、歸途Bolonay附近の古き小舍と塔の一群について試みたり、……其塔は遠方より見れば、遠くMeillerieの靑き山脈の一部を通して眺めしむる上部の開かれたる窓と、その山脈の峻峰に交錯せるその圓錐形の屋根のみが目につく。余は此風景を描かんと欲して然かも自から「山壁や下の平原の一部・何になるか」と獨言した。併し直に自から改めて是等以外他になすべきなきが如くに已の心を全部山壁、平原に投ずるに依つて余は光と力とその美麗しき事を見出せり……人間の魂は全部でありて對象は係る所なしと感じた……」。

更に同じ性質の記錄はシヤモニの途上Sallenchesに於いて見出さる

『午後St. Grevaisに向つて岡を登る愉快な散步をした。……この散步の中で稍疲れてゐたが、又再び如何に自然の力は人が自然に與ふる事の出來る心の貴によるものであるかを非常に强く感じた。自分の前には佳絕の羊腸の徑路、いくつかの岩の堤や花多き牧場、田舍家や敎會堂のある一筋路があつた。Grotte de BlameよりSt. Gervais到るアールヴの全谿谷があり、後方には Doron とその運山、側方には Varens の巨大なる絕壁、その脚下に雲の柱の如き Nant l' Arpenaz がありモンブランと Verte, Argentière を持つたその針狀峰は凡べて余の前方にあつた。が斯くの如き光景にも拘らずデムマアグ・ヒルの散步以上にそれを樂しむところなかつた。此の理由を見出さうと企てゝ、自分は、草又は石或ひはDoron, 又は Naute de Arpenaz 或ひはモンブラン等の如き一つの事物に已を局限した時に直ちに喜を感じはじめたのに氣がついた。即ちそれは當時自分はその事物の中に置くをうる充分なる心を持つたからであり自分の歡びはそれに與ふ事の出來る心的、想像的精力の數量から生じたからである、併し自分が一度に全部を眺める時は其時の厭倦の狀を以つてしては、凡べてに與へうる程充分の心を持たない、從つて何づれも何等價値なきものゝ如くであつた。余はそれを最も意義ある敎と思つた。蓋しこの事は自然の尊嚴は如何に人間の精神の力によるかを示すと共に、一の精神はいかにして一時にその食物として定められてゐる所のものをどけ丈け多く抱負しうるか、故に又如何にして精神が僅かなものに充分の力を投ぜば、其が滿足以上たる事を知つて、僅かなるものを以つて滿足し安じうべきを示し更に食物の過度の飽飫はたゞその精力の過重に過ぎざるべきを示すことである。過重によつてかく精神を碎潰するは巧みに Forbes によつて示されてゐる』

讀者が後に「近世畫家論」二卷に於いて見出す可き印象觀察はかく、アルプス尖峰の傾斜、雲の變化等の觀察、礦物草花の採集岩石の研究等に關する、此の四九年當時の記錄に於て見出さるゝのである。然かも此等の記錄は科學的研究の態度以外に悉く感謝の念と自然への愛着との感情を溢らせてゐる。アルプス谿谷に舞ふ鳥を見ても其中に靈の存在を認むるラスキンの感ずる所は常に宗教的であつた。自然の美、崇嚴、質實の所感は彼をして直に神の恩惠の深大なるに謝せしむるのであつた。六月三日 Vevay に於ける日記には次の記錄を見出す。

『自分は思つた、其は何んたる神の賜よと。家畜と人との食物であり、黑き地にとつての、斯くの如き軟かく綠の、絕えざる、柔らかな被覆を誰が夢にだに考へ得ようぞ。此の牧野的力からは如何なる詩が、その日々の奉仕からは如何なる幸福が、その營養からは如何なる生活が生ぜしやを想へ。人の心を强むる所の食物 ――アゝよくもサアミストはかく云ひて神の勳に數へた「エホバはもろ〳〵の山に草をはえしめたまふ」と』

更に七月十日シャモニに於ける記錄には

『余は、此の地點に於ける狹谷、――小さきも峻しき溪流と、上の堆石より投げ下されたる巨岩、氷河に對して吾々を閉じ込めたる垂直の崖壁、その下に畏ろしき瀑布をひたへたる此の狹谷以上に驚く可き風光を見た事がない。又今宵 Charmy 及 lower Verte に於けるが如き以上に尊貴、赫然たる日沒――灼熱、殆ど血の如き然かも嚴肅なる深紅色の夕陽を嘗て眺めた事はない。……余は、今も亦後も常に、ついて神に感謝すべきものが多い。』と

Laborare est orare. ラスキンの感謝の念は常に彼の勞作となつて現はれた。彼は氷河の間に永き一日を費すと共に谿谷の逍遙に觀察、研究、寫生の機會を得た、是等は既に語つた樣に「近世畫家論」第四卷への資料を構成するものであり、ラスキン自からの言葉によれば彼が片麻岩、氷、雲について學び且つ敎ゆべき所のものゝ核心を爲したのである。

又斯くの如き土地への愛着は、自敍傳に於いて彼が語る所によれば、彼をして後年瑞西居住の計畫を立て土地買收を企てしむるに至るのである。併し此の事は後の機會に於いて語られるであらう。ラスキンは此旅行の途にて兩親と別れ一人山地に滯在して依然其の研究を續けた。然かも最後に其地方を去るに及んでは父に宛てゝ次の如き書翰を投じた

『……併し私は蟻の樣に忙しかつたのです、大分仕事が出來ました。併し時のたつのが何んと早かつたのでせう。木曜日の乘合馬車に申込んで置きましたから、もう直に父上と御一緒になれると思つて喜んでおります。併し本當に旅行に出掛ける爲めに自分の家を離れる樣な氣がいたします……』（八月二十八日シャモニ）

斯くの如き生活はラスキンにとつて最も多幸なりしと共に同時に彼の大著「近世畫家論」によつてみればその生涯中最も收穫の豐かなりし時であるとされてゐる。故に自敍傳に於いて暫らく全代紀的順序に於ける記錄を缺けるラスキンは第二卷第十一章に於いて當時を回想し「モン・ブランの旅舍」なる題下に、其が彼にとつて最も思ひ出多く、感傷的であり且つ神聖なる旅舍なりきと誌してゐる。故に自敍傳に述べられたるアルプス山中の感銘を引用すれば

『斯かる狀態の農村生活の絕對的籠居、自立、

普ねく外來の援助又は吝かなる貯へ等の考慮又は先慮なく、葡萄の房よりつくれる其の酒を飲み、前年の收穫の中よりは唯次の播種にのみ貯へそなふる――よき事に對する感謝と罪深き人命に當然のものとして、禾病、洪水等の一時的禍に對する服從とを以つて神と自然とに對する安らけき自由放任、よきも惡しきも通じて彼等の父祖の生活に固持し、父祖の工具を用ひ、樹木のその根に、岩石がその野の花につくが如くに信實に彼等の父祖の名と原野とに執着せる、かくの如き生活――日曜日の散策に於ける吾人の周圍にある是等のものは上に Arpenaz の塔の灰色にして近寄り難き、遠き隔てる高さに於いて朧げなる障壁、片雲なき氷河の白輝によりて更に晴れ冴へたる朝の空氣と共に、自分にベルン高地のあらゆる微妙なる美と訓練せられたる公正よりも或ひは伊太利の余の最も深く愛せる諸都の嚴めしき市街すらよりも、すぐれて深く且つ驚異にみてる喜悅を與へたのであつた』と。

既に見らるゝ如く此の旅行はラスキンの兩親を伴へるものであつたにも拘らず彼の妻は遂に參ずる事がなかつた。又嘗ては常に一家の旅行に際して行を共にせる從妹のメリーも婚嫁せる爲めに不參であつた。彼女は遂に此の旅行中に死んだ、ラスキンは此のメリーに就いて回想する所あるもその旅行記錄中妻に就いて云ふ所全く無しと云はれてゐる。ラスキン夫人が之れに參せざりし理由は恐らく旅行の煩勞に耐へざるものありし爲めであらうと。自敍傳に於いては殊に四九年旅行の一行を說明してゐる

『此の記錄中にある「吾々」と云ふのは父と母と私丈けである。可哀さうにメリーは最早吾々と一緒ではない。彼女は普通の娘達がさうある樣に――愚かな者共よ彼等は彼等身內の人達と居て家に於いても外國に於いても幸福でありうる可きにも拘らず――嫁にいつてしまつてゐた』。

併し一八四九年十二月十一日附ヴェニス發のダブリュー・エル・ブラウン宛書簡にはエッフィーの事が誌されてゐる。ラスキンの自敍傳丈けを讀む者は殊に妻の記錄が此の際に於いても出て來ない事に疑問を懷く餘地は無いのである。

更に吾々は此の旅行の別個の方面を語らう。此の所謂「地質學」的研究旅行の傍に於いても聖書の精讀は絕える事なかつたのみならず、更にダンテ、アリストファーネス、進んではカアライル、ルッソオ等が讀まれた。彼は此の旅行に於いてルッソオの舊家を訪れた。

『私はルッソオの家に是等の尊崇的參詣を爲した事は私の母親としては極端に快き且つ自由なる心情を示したれと考へる。ルッソオの名と共に、私自身の先師の間に感謝しつゝ、サン・ピエールの名をあげねばならぬ。'Paul and Virginia' が私の早期の讀書の時に於いて非常の影響を及した事を是れ迄恥しくも忘れてゐた。ルッソオの有力なる政治的勢力は之れを私は餘程後まで知らなかつた』。

更にルウヴルに於ける名畫の觀賞アミアン、ディジョンに於ける建築の研究は此の旅行の二次的方面であつた。

此の旅行に於いてラスキンは社會的政治的方面の考察にその力を增してゐる。勿論彼の自敍傳は後年の著作にかゝるが故に其の點に於ける記錄には誇大强調の附加せられてゐる點もあらうが、同書には同年の日誌（五月三日）からシャンベリの老農との會話に「僧侶と收稅官とがあらゆるものを取つて了ひ百姓には黑パンの外何

にも殘さない」と云ふ不平を聞いた旨を掲げてゐる。更に自叙傳では之れに附記して「此種の不平を聞く時は常に諸君が奢侈におごれる首都又は都會に近いと云ふ事を意味してゐるのだ。此の場合ではエース・デ・パンがそれ」と。又既に一寸のべたアルプス土地購入の計畫について語つた後で自叙傳には次の章句がある。

『併し乍ら今自分の係つてゐる年丁度私が三十歳であつた一八四九年までは此種の計畫は毫も私の内になかつた。併し此の年の「近世畫家論」第四卷に主として必要な仕事の爲めに多くは獨りでモン・ブランのまわりのアレ・ブランシュ路やコル・ド・フェレ越を過ぎ更にツェルマアトに到る旅行は、大アルプス山鎖中の農業狀態に就いて憂鬱なる知識を私に與へた。此の知識は聖ヂョーヂ・ギルドの計畫の發源を爲すものであつた。聖マアチンに於ける父と二人の散歩は事實上青年時代の幸福の日を閉し、眞に値する所の仕事を期しつゝ此の世に於ける私の眞の仕事を始めたのである』

此の記錄を殊に最後の點を先に「想像力の厭倦」について引用せる記錄と幷せ讀めばラスキンの心に聊かながらもある不安と動搖とが萠したものゝ如くである。斯くの如き動搖不安がラスキンを何づれに導くかは非常に興味ある物語である。

かくてラスキンはゼネヴァに於いて兩親と會し遂に九月中旬歸國した、然かも二週間後には再び彼は「ヴェニスの石」の完成の爲めに伊太利へと旅行したのである。

二

『私が歸宅した時妻は非常に良くなつてゐました、そして何んとか場所の變化を非常に望んでゐて、ヴェニスに連れて行かないかと云ひました。ミスミ・アンド・エルダアで廣告したのを貴方は恐らく御覽でせうがヴェニス美術の小作に對する或るノートが必要でしたから、喜んで彼女を其の地に連れました』（一八四九年十二月十一日、ダブリユー・エル・ブラウン宛書翰）

一八四九年瑞西より歸來後幾くもなくしてラスキンは妻を携へてシャモニ、北部伊太利を經てヴェニスに赴いた。其は勿論彼が「建築の七燈」中に於いて豫約せる（然かも其の計畫の最初のものは一八四五年のヴェニス滯在中に生じたと云はれてゐる）「ヴェニスの石」を書く爲めではあつたが其の目的は僅少なる考證に存してゐたらしく、基礎的資料に至つては既に過去十七年間に亙つて集められてゐたのである。（第一卷第一版序文）「建築の七燈」は彼によつて「ヴェニスの石」及びエヂンバラ講演中に現されたより正確に且つ考量せられたる陳述の緒言である（七燈第二版序文一八五五年）と云はれてゐるが後者は誠に七燈と同系統に屬すると共に其の所説の布衍的發展に過ぎないのである。建築藝術の研究にヴェニスが撰ばれたる所以は、同地は比較的に限られたる範圍内に建築史上最も興味深き事實を例示せるが爲めで、ヴェニス建築藝術の興亡と其の精神的内容とを明かにすべく適してゐたのである。

彼はヴェニスのホテル・ダニエリに滯在する事四九年十一月より五〇年三月に及んだ。其の間の生活は常に極度の緊張を維持した。元來ラスキンは彼の豫告せる事によつても窺知しうるが如く次の新著は單なる蒐集資料の整理に過ぎざるものとし其の容易に實行せらるべきを信じてゐたらしく且つ文獻によるヴェニスの歴史的研究は既に得る所多大であつた爲め、此の根本的確定に對し僅かの補足的研究をヴェニスに於いて豫期したのであつた。然かるに事實補足的であつた此のヴェニスの研究は豫期の如く簡單なものでなく又ラスキンの科學的性質を滿足せし

むるには多大の時間と勞力とを必要とし且つ困難とを伴つた。彼が「ヴェニスの石」第一卷第一版序文に述べたる所によれば彼の初期の目的は中世建築の年代歴史スタイル等に關する正確なる知識を求むる事であつた。併し其等に關する權威ある定論は其地にすら存しなかつた。從つてラスキンが感じた必要は、全體に亘つて自から新しく探索を試みる事であつた。

『此の宮殿に關する歴史的記錄は一つの混亂の集合であります。その設計者の名は知られてゐません、建築家は其の柱の上で絞殺された人即ちCalendarioだと云はれてゐますが他の說によると彼は此の宮殿の建てられる以前に絞首されてゐるのです。而して最も多くの記述は頂の方が底の方より先きに建造されてゐたと云ふ事を證するに一致してゐます。私は斯くの如き狀態に參つてしまひ、仕事に從事してその彫刻を各分類に區別しはじめました。私は此の建物の上に異れる六つの時代の仕事と――その時代のいくつかに於いては一人以上の建築家と――が存在した事の內證を得ました。是等の廣汎な事實を私は整理します、そして誰が誰だと云ふ事については彼等の好む儘爭はしておきます』（一八四九年十二月二十三日父宛の書翰）

『かくて古い宮殿の一つ一つを一石一石と穿鑿する事のみならず、そのスタイルの形式に何か手懸を提供する各斷片を市中に亘つて調査する事が必要となつた』（序文）斯くの如き科學的正確を期するラスキンの努力は實に素晴らしいものであつたらう。その研究が精密なるは其努力の結晶である「ヴェニスの石」全三卷が遺憾なく之れを物語つてゐる。『何ものも豫め定められたるものとして認められてゐない、讀者は各段階に於いて礎に引き下され、流派の權威と偏見とから脫して自由に自己の判斷を爲すべく勸められてゐる』と云へるイー・ティー・クックの言葉は明確に「ファウンデイション」と名付けられたる第一卷の性質を說明してゐる。

ラスキンは一八五一年より五二年にかけての冬を再びヴェニスにて送つた。此の兩度の滯在中彼がなした測量、穿鑿、寫生の夥しき勞作は懷中用の小手記より每夜大型のノートブックに感想、備忘、推斷と共に淸書された。此のノートブックこそ充分なる索引を附せられ「ヴェニスの石」其のものゝ何等異る所なき形體をとつた。かくして「最後に其の論文を書くに到つては彼は唯それを詳述したに過ぎなかつた」と云はれるのである。

此の滯在は一八五〇年三月を以つて一時終つた、其の英吉利に殘れる彼の兩親の健康が稍や害はれたによるものらしい。かくて彼はゼノア南佛蘭西を經、ヴァランス、ヴィエンヌ、リヨン、ブルジュの諸地の建築を研究しつゝ四月末日に歸國した。併し「ヴェニスの石」は一八五一年に於いて第一卷のみが公にされたに留まりその完成は五月一日に於ける日誌の記錄にも拘らず（註一）五一年より五二年に亘るヴェニス再訪の後に讓られたのである。併し玆にも亦ラスキンの別方面に於ける記錄があるによつて筆者は年代順にその方面についての物語を挿入するであらう。

註一　デムマアクヒル、一八五一年、五月一日、朝、全ロンドンは又全世界のある部分は動きつゝあり、余は鳥の歌をきゝつゝ己の靜かなる部屋に坐しつゝ、余のヴェニス著作の第二卷の著述を正に始めんとす、神よその完成を助け給へ、彼の光榮と人の善の爲めに。

ヴェニス歸來後の彼にはロンドンの社交期があつた。其は彼にとつて惱ましいものであつた

に相違ない。更に同年五月ラスキン夫妻はヴィクトリア女皇に拜謁した。前者はラスキンの製作の進行を妨げたらしく五二年二月の手紙には五〇年の春多大の期待を以つて歸國せるに拘らず後三ヶ月の社交期は彼を妨げた旨を誌してゐる。從つて彼は冬になつて其の著述とエングレイヴァーとの面倒なる交渉に懸命の努力を拂つた、かくして「ヴェニスの石」第一卷は一八五一年三月三日に公にせられ次いで Examples of the Architecture of Venice の名の下に大型二ッ折版の三部の圖譜が同五月と十一月に刊行された。併し第一卷公刊の後ラスキンは暫くその注意を別の方面に轉じたのであつた。

附記　一八五〇年には父ジェームスとダブリュー・ハリソンの手によつてラスキンの幼時青年時代の詩の選集が企てられ又「黃河の河の王」が公刊された。兩者（後者はその第一版）共にラスキン著作中より少ナルの珍書とされてゐる。

三

一八五一年の春プレ・ラファエライト・ブラザアフッドの統領であるジェー・イー・ミレイスはラスキンの友人バトモアを介して彼に彼等の窮情を救はん事を求めた。事の顚末は次の如くである。一八五〇年にミレイス、ホルマン・ハント等がローヤル・アカデミーに出品せる彼等の諸作はあらゆる批評家、雜誌から忌憚なく、同情なく然かも辛辣、惡意の非難を蒙つた。一八四八年に其のブラザアフッドを組織した是等青年畫家が其の所信に向つて進む路は極めて嶮しきものであつた。惡辣なる酷評は彼等の藝術的生活に多大の障害を與へた。ミレイスの痛憤は其の極に達し、かつてより交のあるコヴェントリー・パトモアがラスキンと交友あるを知つて彼を介して此の美術批評界の新進の雄に其の援助を求めた。ラスキンは快く之れを容れ、前にプレ・ラファエライトの畫家に對する酷評を載せた

事のある關係からタイムス紙上に二回に亘つて辯護論を書いた。筆者はラスキン本來の美術觀とプレ・ラファエライトの藝術とが果して一致するものなりや否やを自から斷じ明かにするの資格を持たぬ。故に最も興味ある場面に就いて省筆するの遺憾を感ずる。併しラスキンのタアナア論上の主張とプレ・ラファエライトの藝術との間には直接、直面的關係は無い樣に解せらる。現にミレイスとラスキンの間にはタアナアに對する意見の相違あり又ラスキン自身はタアナア、テイントレットを見出したるが如くにプレ・ラファエライトの畫家を見出したのではない。ラスキン自身の云ふ所によれば初め彼はその作品は多大の興味をそゝらるる事なかりしものゝ如く、此の事情はローヤル・アカデミー會員ダイスがラスキンを捉へてミレイスの繪の効果を敎へたる事によつて語られてゐる。故に一八五一年の五月十三日と三十日のタイムス紙上兩度の寄稿は寧ろラスキンの主動的仕事ではなかつた。併し同年公刊された小冊子「プレ・ラファエリティズム」はラスキン快心の作と稱されてゐる。

ラスキンが是等青年畫家に對する態度は何であつたか。吾人は屢々ラスキン從來の所說よりして其美術論中に彼が藝術家其の者の精神に重きを置くを窺ひ知る。彼が尙ぶ所のものは、畫家の眞摯なる態度である、彼は製作に於けるある精神的要件を必要としてゐる。タアナアに見る想像力の雄大なる高翔はこの精神を前提として作られる、從つて眞摯なる學究的態度はいづれの藝術家にありてもラスキンの之れに懇篤なる所である。その製作の結果成績は次序である。『人が人として働き彼等の心胸をその製作に沒入しその全力を爲すならば、彼等が如何に

惡しき工匠なりとも其は問題でない、その製作振りにはあゆる値以上のものが存するであらう』とは「建築の七燈」に於いて彼の云ふ所である。之れを以つてラスキンの藝術論の全部となすは正しくない、此點は更に後段に於いて詳說せらるゝの機會を有する。併し己の力を過信する者に對しては訓へて反省せしめんとするラスキンも美術家の眞摯謙讓なる態度には充分なる尊敬を拂ふ。初めプレ・ラファエライトの畫家達がラスキンより得たる所のものは此の種の褒辭であつた。（五月十三日タイムス紙上の所論）然れ共ラスキンは更にプレ・ラファエライトの畫家達が把める或る眞理に就いても見逃す者ではない。故に作品に加へられたる勞働と眞摯とは暫く皮相的批判を絕すべしと云ひ更に轉じてはローヤル・アカデミー出品中他の作品に比してミレイス、ハントの製作が拙劣愚鈍に非ざる事をも指摘す。故に是等の畫家に對して其發展上重大なる時機に於ける批判の愼重は是も必要にして彼等に溫かき指導を與へてこそ更に偉大なる將來を期待しうべしとなす。

かくてラスキンの辯護は批評の嚴正の中に溫かき同情を含めてゐる、ミレイス、ハントの將來に期する所且つ頗る大である。『彼等は經驗をつむに從つて世界が此の三世紀間に眺め來たりしもの以上に崇高なる一派の藝術の基礎を吾英國に置くものであらう』とは五月三十日再びタイムス紙に寄せたる批評の結句である。

ラスキンは是等の畫家の作品を充分に觀察するに及んで更に深き感銘を得た。其はプレ・ラファエライトの畫家の忠實なる自然描寫、寫實主義がラスキンの「近世畫家論」第一卷の思想に合致せる點である。ラスキンはミレイスの描いた澤瀉の描法によつて强く動かされ、彼はかくも完全に且つ巧みに描かれし此の水草を嘗て見た事がないと云ふ（タイムス寄稿）植物の觀察研究に忠實なるラスキンをしてかく云はしめた所に是等青年畫家の眞摯忠實なる態度がある。「近世畫家論」第一卷に現はれた思想は若き藝術家が自然に對する絕對的服從謙讓の敎であつた、修業の徒として若き畫家は全部を大自然の前に擲つて恭順に其の美その實を學ぶ可きである。從つて在來のコンヴェンショナリティーに就く事を許されなければ不謹愼且つ自然の冒瀆改竄を意味する傳統的形式も許されない。プレ・ラファエライトは此精神に遵ひ行つたものと思はれた、彼等は其名稱にも拘らず古代繪畫の何ものをも摸倣しようとは考へてゐない。彼等は現代の知識發明が彼等の藝術に與へたるが如き利益に直ちに屈服しない、彼等は繪畫製造のコンヴェンショナルな規則に囚はれず直に彼等の眺むる所のものを、或ひは彼等が現はさんと欲せる事物の實相と思惟せるものを、描かんとする點に於いてのみ昔に歸へらんとする、彼等は唯不幸なる名稱をとつた、が其は不正確なものではない、蓋し、ラファエル以前の畫家は皆此の態度を持したがラファエル以後の畫家は皆嚴正なる事實を現はさんよりも寧ろ巧なる繪を巧みに描かん事に腐心し如上の態度を失つて居たからである。（五月十三日タイムス紙上の寄稿）

この二つの態度はラファエル前派の畫家をラスキンに結びつけたものである。此の辯護の後に於いてハント、ミレイスはラスキンに宛てゝその感謝の書を送つた。ラスキン夫妻はミレイス等を訪れた、然かも此の最初の會合に於いてラスキン、ミレイスは文字通りに十年の舊知の如くあつたと傳へられてゐる。

一八五一年八月十三日にラスキンが公にした

Pre-Raphaelitism は「近世畫家論」第一卷の態度に於いてラファエル前派との關係を批評したものに外ならない。即ちラスキンに從へば、彼等の寫實主義の態度、非因襲的態度は「近世畫家論」第一卷第二編第六部第三章第二十一項に掲げられたる所である。筆者は嘗て「近世畫家論」は己の爲めに書かれしものかとの魅力の中にホルマン・ハントが同書を熟讀したる事を記した。ラスキンに從へば此の點こそハント等をして其の教理の大なるに感せしめし所以であらうと爲す（此の時ラスキンは丁度第一卷の第三版を用意してゐた、故に此版にはプレ・ラファエライトに關する種々の傍註が加へられてゐる）。斯くの如き關係に立てば、ラファエル前派の畫家に對して加へられたる非難は轉じて青年畫家に對するラスキンの教義への非難である。茲にラスキンは自己辯護の必要を感ずると共にそのタアナア論とラファエル前派の辯護との間に指摘せられたる批評家の矛盾論に答ねばならなかつた。「ラファエル前派論」は此目的の爲めに書かれた。

附記　ミレイスの語る所によるとラスキンはタアナアを支持しミレイスをしてタアナアリアンたらしめんとし後者はラスキンのタアナア狂が漸次弱くなるものとしてゐる。故に筆者自から果してタアナアとラファエル前派の態度が一致するや否やは斷じない。唯ラスキンの所說を陳ぶるに止まつてその決定は他の適者に讓るのである。

ラスキンは同書序文に其の目的を明かにし、彼が八年以前に英國青年畫家に提したる忠言の忠實なる實行者がその報酬として受けたる最も惡辣なる酷評を駁し、彼等の作品が或る點に於いて論評を絕するの功績を有せるを語らんとする。ラファエル前派の精細なる寫實主義と奔放極りなきタアナアの想像力とを合致せしめんとする企圖はタアナアの作品に於ける歷史的變化の說明に於いて見出される。此點に於いてこの一小書はその後半タアナアの藝術論並びに評傳である。此の評論の資料はタアナアの友人であり且つ作品の蒐集家であつた Farlney Hall の Walter Fawkes の息 Francis Hawksworth Fawkes 氏の下に於いて得られたのである。かくてラスキンはタアナアを目して最も偉大なるプレ・ラファエライトなりと主張しミレイスを目しては意識せざるタアナアリアンなりとしてゐる。第一期に屬せるタアナアの作品は主として素描單彩であつた。彼が色彩に注目し充分に之れを利用するに至つたのは第二期に於いてであり、第三期に及んではその作品の自由、不羈、奔放たる中にタアナアの眞價が發見せられる。ラスキンの尙ぶ所は勿論この最後の到達點である。が其の以前に永き修業の道程を必要とする、畫家各自の眞價天才の發揮せらるゝ方面は人によりて多岐である、併しその修練の路はたゞ一つで、自然に忠實なる態度それである。此偉大なる畫家の進んだ路こそ畫家としての萬人が進む可き路であると說き、觀察の科學的正確が屢々失ひやすき幽玄なる美的情調の潤を失ふ事なきは一つの德であると論じて擱筆してゐる。

附記　「ラファエル前派論」の最後の所說はアルプス山中に於けるラスキンの實感である。彼は一方極めて正確忠實なる科學的觀察力を持つてゐるにも拘らず他方之に潤澤があとふる詩的ローマンティックの感情を失はなかつた。堂々たる科學的資質を持してしかも科學者たり得なかつたのはラスキンの特性である。然かもラスキンの愛敬しておかざりしアルプスの山地も時に於いてはその科學的知識が之れより詩的感情を奪ふ事あるを記してゐる。一八四九年の瑞西旅行中（七月二十九日）彼は「無知の利益」と云ふ事を考へた。其はイー・テイー・クックの記する所によれば、「自分（ラスキン）のアルプスの知識がそれについての莊嚴なる印象を減ぜる」に從つて起り如何にして「地層、構成の研究があらゆる山の莊嚴を減じて單なる石屑、壁狀物と映ぜしむる」かについて生じたものである。更に此種の感情はヴェニスに於いてもラスキンの感ぜる所であつた。（一八五九年五月 C. E. Norton 宛書翰）

之れに從へば彼の愛せるヴェニスもローヂヤースの云へる如く「海中に輝ける都あり」でなくして「泥中に輝ける都あり」と映じ「大理石の女王と而して泥土の女王」と眺められたのである。

故にラスキンがプレ・ラファエライトの畫家に對する態度は指導的である。ホルマン・ハントに訓へては自然そのものに就いて學べと云ふ、ミレイスに對しても多大の將來を有する此の青年畫家が自己の理想と合す可き成熟を望んで如何に進むべきか、其の路を敎へんとしたのである。

更に此小著の中にも彼の社會思想の發展を指示しうるものがある。起筆に當つて彼は云ふ、彼の勞作なくして人を生活せしめ給はずとの神の御心と同じく神は人が彼の勞作に幸福なるべきを思ひ給ふのである。「汝は面に汗して食物を食ふべし」とは書かれたれど「汝の心を碎毀して食ふべし」とは書かれてゐない。夥しき不幸は自己の適せる仕事を爲す事なく、自己の關係すべからざる事に多くの過誤の種を播きつゝある怠惰なる者によつて作らるゝと共に、他方には同じく少なからざる窮厄は勞作に就いて必然に彼等自から持せる又は他の者に强要せる、陰暗なる見解を以つて過勞せる不幸なる人々によつて生ずるのである。「然らずとせば、彼等の不幸なるその事實は自體神法の侵犯であり彼等の生活方法に於ける或種の愚と罪との證なるを余は信ずるのである」。故に喜悅に充てる製作を說いて其の要件を擧げる、一つは自己に適へる仕事にして二つは過勞の弊を免かるゝ事三つは自己の判斷に確信を有すべき事である。即ち第一には人が矜飾なくして好み行はんと欲する所のものは彼の天職たるべく、從つて仕事の性質如何を問はず、他方には各職務の神聖を保持すべく、謙讓卑遜の德性の要を說く。勞働過度に對しては社會事情による其の弊の大なるを眺めつゝ、其の本質に就いては天賦能力によつて人の製作上の能力に優劣の決定的基礎を求め能力に缺ける者が徒に大業を羨望して悲慘なる境遇に墮するを戒めてゐる。第三の點に至つては自己所信を確立して迎合主義の卑怯に墮せんとする者への抗議である。斯くの如き所說は一八四九年「建築の七燈」に於いて一部開陳せられたる所、更に「ヴェニスの石」第二卷に於いて發展せらるゝ所、勞働、製作の喜悅幸福を唱ふるラスキンの最も獨特なる主張である。

附記　「プレ・ラファエリテイズム」はラスキンの矛盾に對する辯護であつたにも拘らず同樣の非難は變じなかつた。併し彼自身は其の構成に充分なる力を致した故に寧ろ快心の作と思つてゐる（一八五一年九月二日ヴェニスよりの書翰）併し批評家の頑迷愚鈍、就いては餘程感情を害したらしい。其の序文（前出）は傲慢であると感ぜられた、ラスキンは之れを認めるがかく云ふ「自分は己の感ぜざるモデステイーに依つて書く事は出來ない、美術の事と云へば自分は少しもモデストで無い事にしてゐる、日々自分は全歐羅巴の人々が、殊に上流階級の人々が猶更、その第一原理に關して全然無知なる事を認める……」と（九月九日書翰）批評家は「唯幅廣の面をした、羊や豚の樣に間抜けな愚鈍」な奴等である、故に其の反感は寧ろ惡感に近い。「其れは彼等の惡意ぢやない――惡意なら、其れが悧悋ならば、之れに勇敢に且つ論破するに値すると云ふ感を以つてぶつかつて行ける。併し此の哀れな批評家共は、彼等の眞底本當の、最も正直な心でゐて、自分の書いた言葉を一々誤解してゐるんだ、自分は彼等にもつと以上によく敎へるなんて事は出來やアしない」（九月二十八日書翰）

ラスキンがプレ・ラファエライトに對した同情はそれ丈けではない。彼等の作品の購入は經濟的苦境に立つ青年畫家を喜ばした。評論に於いては「近世畫家論」「ヴェニスの石」等に於いて屢々其の畫家に就いて語り一八五三年のエヂンバラ講演にはその一題目となつた。五四年再びハントに代つて彼の作品の說明をタイムスに寄せた。

是等の事情からしてラスキンがラファエル前

派の創成者の如く觀ぜらるゝ事は否定せらるべきである。オリヴァー・エルトンはラスキンのプレ・ラファエリティズムを目してタアナア、ティントレットの發見に次く第三の發見であるとなすが、此の三者には自から相違がある。タアナア、ティントッレトに關する相違は既にのべた。プレ・ラファエライトとの關係は既に記せるが如く其の發端はラスキンの主動ではない。同畫派は一八四八年に成立しハント、ミレイスは既にその目的理想の追及を企てゐた事、又ラスキンが第一印象に於いて彼等の作品を認めなかつた事等は其間の消息を語る。勿論ハント等が企てたる新運動にはラスキンがその偉大なる代表者である事又ハント、ミレイス等がその新機運の代表者としてラスキンの著作を讀んだ事は疑ふべくもない。併し兩者共に同じ時代の所産であるが故に深い關係を否定する事は出來ないが、ラスキンがその時代を作り出したりとせばあまりに個人の力を過信するの譏がある。唯一八五一年ラスキンの救援はハントの書する所によれば、正しく晴天の霹靂の觀があり、彼等の運命の轉換期を劃したのである。青年畫家の所信を確固たらしむると共に浮動的なパトロン、畫商を安心させ批評家の見解を正しめたるの貢献は疑ふを得ない所である。

四

「羊舍構造論」は一八五一年に於けるラスキンの努力の別個の方面を語るものである。

ラスキンの宗教的感情は屢〻既成宗教の形式より脱せんとしてゐるが、此の當時に於ける彼は未だプロテスタンティズム信奉者であり羅馬加持力教會との分離對立を主張し寧ろ極力後者を非難攻擊せる者であつた。故に羅馬加持力教會の名に關連せるものは悉く彼の排する所となつたが、英國に於けるオクスフォード運動は一方に於いて同國の加持力派の勢力を振興せしむるの結果に到ると共に、漸く認められ來つたゴシック美術、即ちゴシック復活運動は其の關係を羅馬加持力教會に結んで居る樣に思はれた。ラスキンにとつては此の最後の點を斷然分離せしめなければならなかつた。彼が尊重せるゴシック建築の精神と羅馬加持力との關係を結び認める事は彼の當時の宗教的感情の許さぬ所であつた。斯の如き事情よりして彼は「羊舍構造論」の名の下に宗教論殊に教會に關する彼の所說を公にしたのである。彼の主張せる所はプロテスタンティズムと羅馬加持力とは峻嚴に差別せらるべき性質なるが、プロテスタント中に諸種の分派を有するは最も愚なりとしプロテスタントの合同を唱ふるのである。プロテスタントの或宗派が其の教會僧職に就いての概念をローマ教會のそれに從つて何等怪しむことなき不合理を非難し、教會並びに僧職の本質を明にせんとしてゐる。彼に從へば教會の諸職位は何づれも民によりて教會の職務を委托せられたる人々であり、從つて僧職にある者が特に一般基督教徒よりも神に近くより神聖なるものなりとの觀念を排し、かゝる觀念に從つて僧侶の有する諸權能を否定せんとする。即ち

『敬神なる凡俗よりもより多く priest なりと云ふ僧侶の側に於ける冒瀆極まれる要求は——凡べてローマニストの主張せる異端說である』

從つて其の及ぼす害惡の最大なるものは

『俗衆自からの神聖なる性質は忘れられ、彼等自からの牧師的義務は等閑に附せらる。教會に於いて職務を有せざる人はこの理由に基いて自から一種の非神聖なるものと思考する

に至り爲めに僧侶よりもより多くの口實辯辭を以つて罪を犯し得べく、より少き危險を以つて怠慢、不信であり得べしとなす、殊に彼等は自からあらゆる牧師的職能に與るを免れ、其の全生涯と勢力とを此世に於ける業務に傾注するを許されたるものと思ふに到る』。

僧職の權威は知あつて愛の具有を必要とす、其職にある者は一般信徒と異る所無い、修道に關しては神法と教會法の執行に與るものであるが、其の權威は各人の良心に彼等自身を臨ましむるに存する、其は神の使徒であつても又自から神の民であつても要するに完全にして且つよき仕事を爲すべく敎へられたものとしてゞある。

神の存在、眞の開顯は個人の求道的努力によるの外はない、僧侶は其の努力を援助しうるのみにして、それ以上を爲しうるものではない。

「眞」の在所を指示しうると爲すが如きに彼の爲し得ざる所を示さんとするものである。ラスキンによれば宗教の原理は、（一）求むる事なくして眞理は認めらるゝものに非ざる事、（二）求むるによつては最も單純なる者によつても發見せらる事の二點にある。

斯くして彼は教職にある者と凡俗なる者との間に於ける本質的相違を否定する。其小著の中に彼は政體論に言及するや政教の確然なる分裂、本質的分離を悲しむのである。

羅馬加持力教會の教義に反對してプロテスタントの合同を說き、高教會派とエヴァンヂェリカル派の合一を勸むるラスキンは「其は現在に於いて好厭の問題に非ずして義務の問題なり」とし、誤れるローマン・カソリックに對する一個の合同的勢力を形成せよと云ふ。全プロテスタントを一つの大なる羊舍の內に統一せよ、其は全

プロテスタントが聖書の正しき解釋によつて當然義務と感ず可きものであると。

Notes on the Construction of Sheepfolds の題名はスコットランドの農民をして「羊小屋」構造の知識を得んものとの希望より之れを手にして多大なる失望を感ぜしめしエピソードを持つ。ラスキンの著書は常に斯くの如き性質を帶びてゐるのである。

ラスキンの此書に於ける知識は彼の永き聖書研究の結果であり、從つて序文に云へる「執筆の早急」にも拘らず「思考に於いて然らざる」のは此の意味である、即ち其の幾部分は彼の聖書研究に伴へる記錄を同誌より抽出したのである。又全文は建築論即「ヴェニスの石」第一卷の補遺（第十二）を爲すもの丶單行本である。

其後彼は其の宗教論、教會論を直に續けて公にする事なかつたが、かのフレデリック・デニスン・モウリスとの交渉はこの書によつて開かれ、同問題に關し兩者の間に幾多の書翰が往復せられた、一八九六年印刷せられたる『「羊舍構造論」に關するジョン・ラスキンとエフ・ディー・モウリス』は是等書翰集である。

一八五一年に於けるかゝる宗派的態度は後にラスキンの棄てし所である。そは「羊舍構造論」後年の序文に明記する所であり自叙傳其他に於いて常に述ぶる所である。ホルス・クラビゲラ五七書簡にはプロテスタント對カソリックの差別を論ずる事を以て全く滑稽且つ意義なき哀れなる問題であるとなす。要するに彼はエヴァンヂェリカルの訓育を受けし爲め初期に於いては强くその影響を示すが彼獨特の聖書研究が深奥になるに連れ、又諸般の觀察の廣大になるに從つて彼の心は漸次偏狹なる形式的宗教より離れて純眞なる宗教的感情に移つて行つたので

ある。『彼の廣汎なる著述の背景をなせるものは實に彼の連續斷つ事なき聖書研究の日課であつた』とはイー・ティー・クックの所言なるが誠に彼は純然たるバイブル・クリスチャンであつた。

一八五一年ラスキンが再びヴェニスに赴く以前の生活は斯くの如きものであつた。吾々は再び彼の建築論に戻らねばならぬ

（未完）

リカアドオ派社會主義概論（中）

津田誠一

八

自傳に依れば John Gray は Derbyshire の Repton に於て小學教育を修了の後十四歳の春倫敦に志し一商館の顧員となつたが、時宛も奈翁戰爭の餘波を受けたる社會的動搖を背景として大都會の世相は混亂の極致に達し、忽ち少年の心を沈痛なる憂色に閉ざした。「何物かゞ間違つてゐる。何等かの絶大なる誤謬が此生動せる群衆中に存在する。就中自然の全秩序に背戻せる觀あるは、人類の交易の行程である。蓋し神は其創造に當りて人の子を、吾人が隨所に看取するが如くに、專ら相互の障礙物たらしめんと企圖せるにはあらざる可し」との懷疑が徐々に彼れの胸奥に胚胎した。爰に於てかグレイは商賈の傍ら經濟學の考究に潛心し、斯界の權威「國富論」第一卷を讀破して遂に現存經濟組織の窮極の缺陷は生産が需要の原因たらずして需要の結果たる點に在りと悟了し、其所論を演述す可く「粗暴幼稚苦澁匡救す可からず」と自認する "The National Commercial System" なる一論を脱稿したが、諫止する者有りて上梓を斷念した。然るに後日 Owen の諸著を味讀するに及びて其屢々自説と投合する節有るを知り、鷄肋乘つるに忍びず再び筐底の舊稿を拔抄し剞劂に附して世に問へるものが即ち "A Lecture on Human Happiness" 1825 であつて、爾後久しきに亘り啻に英國社會主義者の好伴侶たりしのみならず、亦た米國費府に於て翻刻せられ此地の初期社會運動に貢献する所甚大であつた。Owen が其一本を米國より持歸り倫敦に於て再刻流布せしめたる事實は、同書聲價の一端を窺知せしむるに足る。是より先きグレイは Orbiston に於る Owen の共産部落を援助す可く一八一五年蘇格蘭に趣いたが、固より Owen との間に介在せる重要なる諸點に關する見解の疎隔は、到底雄圖を試るの境にあらざるを悟りて惆悵失意の裡に此地を去り、慷慨の氣の逃る所 "A Word of Advice to Orbistonians," 1826 の一篇を草して烏合の衆を Owen の理想通りに訓練統率するの至難なる所以を力説し、以て同志に對する分袂の辭とした。其後は蘇格蘭の他所に定住して操觚を業とし可成りの成功を收めたが、老來意氣漸く衰へて當年の革命的鋭鋒復た見るに由無く、一八四八年に於ては其著 "The Social System" 1831 の銘題に使用せる Social なる文字が、何等共産主義的意義を具現せるにあらざる事の辯疏を致せる程である。Foxwell は曰く「グレイの經歴の數奇なる、彼れを以て社會主義の列伍に算入するの失當なるを思はしむ。然も其著 "Lecture on Human Happiness" は確に社會主義的文獻の最も顯著なるものなり。其如何にしてグレイの手に成れるやは余の常に理解に苦しむ所にして恰も平靜なる蒼穹に雷霆の一過せるに似たり」と